
バカとテストと疫病神

ラーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと疫病神

【NZコード】

N1263Y

【作者名】

ラーカー

【あらすじ】

疫病神と呼ばれ、敵にまわしたら、さまざま手段を使い災厄を撒き散らすとされ、なかなか人と仲良くなることの少ない山本総司は、振り分け試験を受けらんなかつたがゆえに、Fクラスに入る事に。そこで個性的なクラスメイトとどう過ごすのか？
バカテスの一次です。作者は文才がなく行き当たりばつたりなのです。批評やアドバイスなどを待ちしています。因みに更新は不定期です。

始まる前（前書き）

それじゃ、始まり始まりってか？

始まる前

「うぞこくらー」に澄み渡った空を眺めながら、僕^{（やまやと）}と山本^{（やまやまと）}総司は他の学生に混じって、ゆっくり登校している。

「世界つて、なんか嫌いだな……」

この考^{（か）}えは人それそれなので、意見は受け付けない。

「おい、山本」

横から、西村先生こと鉄人が声をかけてきたが、無視して歩き続け——

「無視をするな」

られるはずもなく、あつさりと襟首を掴まれて、引き戻される。

「おはよー」やこめす

「人を無視した後に、爽やかに挨拶をするな」

じゃあどうしようと？

「鉄人先生、なにか用ですか？」

それはともかく、西村先生に用を尋ねると、頭を抑えて、

「……面と向かって、鉄人と呼ぶのは、お前と坂本くらいだな。用はこれだ」

そういつて、箱から封筒を取り出し、僕の前に差し出した。

「あ、クラス編成の発表ですか」

そう言いながら受け取る。

クラスのめぼしは付いているのが、一応、封筒を破つて確認する。

「うん。予想通り」

そこには、でかでかと

『Fクラス』

と書かれていた。

ちょっと事情があり、振り分け試験に出ていないため、点数がリセットされ〇点なのだ。

「山本」

「何ですか？」

「この結果だが、お前が振り分け試験に出ていたら、CまたはBクラスには入れた筈だ。……なぜ休んだ？」

そういえば、無断欠席だったけ？

そんな事を思い出しながら、いつ。

「忘れてました」

それを聞いて、呆れ顔の鉄人先生を無視して、教室へ向かう。

「Fクラスか…………。楽しめるといいけど」

その呟きが聞こえたのか、近くの生徒が嫌そうな顔をして、離れて
行つた。

始まる前（後書き）

感想など、お待ちしています。

キャラ設定（前書き）

オリキャラがでる度に更新します

キャラ設定

やまもとさちうじ
山本総司 男 17歳

家族構成
オカマ 父親と姉の3人家族

見た目

濁つた感じの茶髪で、顔立ちはやや整っている。身長は175cm
くらいで、身体は無駄な脂肪が付いていない。

面白そうな事には、首を突っ込んで引っ搔き回し、飽きたらそのまま放置するような、根っからの快樂主義者。

頭はいい方だが古典の成績は壊滅的。得意科目は数学で腕輪持ち

召還獣

見た目は格闘家のような姿

武器は腕に巻き付けている鎌で、基本的に振り回して戦うが、別に接近戦が弱いわけではなく、むしろかなり強い

腕輪の効果は【自爆】で400点を消費して、フィールドの召還獣すべてを一掃する。
因みに自分は生き残る。

キャラ設定（後書き）

こんな所かな

はじめてFクラス（前書き）

それじゃ始まり始まりってか？

はじめましてFクラス

「……………ボロいな」

クラスに入る前の、いや旧校舎に入つてからの感想を呟きながら、
我がFクラスの前に立つ。

「おはよ〜!!」やれこまへす」

そう言いながら、教室に入ると、Fクラス全員の視線が突き刺さる。

その無遠慮な視線は、主に男子生徒から…… つて男しかいないじゃ
ないか！

「おい、お前」

教室の前で、クラスメイトの男女率の偏りに驚いていると、教壇に
仁王立ちする185cmくらいのたてがみのような髪をした男子生
徒が声をかけてきた。

「おはよ〜。え〜っと誰だっけ?」

割と有名人だつた気がするが関わりがないため、あまり覚えていな
い。

「代表の坂本雄一だ。教室の前で立ち尽くすな、邪魔だからな。席
は自由だから好きな席に座つておけ」

「はいよ〜」

適当に返しながら席、とこいつが卓袱台（正確には座布団かな？）に適当に座る事にする。

「おせぬひじめ」

「うそ？」

座るとすぐ隣の席の美少女が話かけてきた。

「あ、女の子いた」

女の子はこないかと思つたがひいやい町とかつたりしこ。良かつた良かつた。

「わしさ男じやー。」

…………は？

「こまなんど？.」

なんか男と聞こえた気が……

「わしさ男じやーと聞いたのじや」

なん…………だ…………どー？？

「ナリもで驚かんでも……。まあ、気持ちはわからんでもないが……」

…………

「う、嘘だろ…………

「爺言葉で話していいだと！？」

「そこは驚く所ではないぞい！？！」

うん、いいシッ 「ミミだ。

「冗談だ。僕は山本総司だ。よろしくね」

「いや、本気に見えたぞい……。気を取り直して、わしは木下秀吉
じゃ。こちらこそよろしくお願ひするぞい」

ニコッと笑った顔にグラッときたが、精神力で持ち直す。あ、危な
かつた。危つく惚れてしまふ所だった。

後ろでカメラを構えているバカを無視して、秀吉（びつやう）本当に
男らしい）としばし、雑談をする。

始めからいい感じに話し相手が出来たし、退屈するかもしれないが、
悪くない学園生活が送れそうだ。

ガラツ

『早く座れ、このウジ虫野郎』

前言撤回、退屈しない学園生活が送れそりだ（笑）

はじめましてFクラス（後書き）

雄一・秀吉登場。

次回は観察処分者登場

批評や感想、アドバイスなどよろしくお願いします。

後の祭り（前書き）

始めます

後の祭り

「ウジ虫野郎つて（笑）」

坂本の台詞に笑いをこらえていると、秀吉が

「あやつらは本当に相変わらずじやのう」

「？ 秀吉つてあいつらの知り合いか？」

秀吉の台詞を聞いて、教壇で話し合っている二人を一瞥しながら、
気になつたことを訊く

「去年は同じクラスでのう。あやつらは友人じや。…………そこで
カメラを構えておるのも友人じや」

そこでカメラのシャッターをきつているバカを指す。

「さつきから無視してたが、お前はなんなんだ？」

「…………なんだかんだと言われたら「それ以上言つたらカメラ破壊
するぞ」…………〔冗談〕

まったく、国民的キャラのボケをかますとは、予想外だつたぞ。

「…………改めて、土屋康太。…………よろしくな山本」

「名乗つたつけ？」

「…………さつきの自己紹介を聞いた」

「あつせ。総司でいい。僕も康太と呼ぶから」

「…………わかつた。よろしく総司」

「…………」

康太との面おもて見紹介（？）が終わると、おそらく担任で あらうつ冴え
ない風体のおじさんが教室に入ってきた。

それで前で話しあっていた一人もそこら辺の席（？）につく。

「えー、おはよう」やれこます。一年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願ねがいします」

そう言って名前を黒板に書かいて止めた。ざつやうチヨークが
なかつたらしい。

「皆みな全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下せ」

「この設備は卓袱台と座布団と畳。…………斬新な設備だな……。

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってません』

「我慢してください」

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています』

『木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください』

『せんせー、窓が割れていて風が寒いんですけど』

『ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきます』

扱いに差があるとは聞いていたが、Fクラス《最低辺》になるとこ
んな感じなのか……

「必要なものがあれば極力自分で調達してください」

「…………真面目に振り分け試験に出ていたら良かつた」

今更言つても完全に後の祭りである。

後の祭り（後書き）

感想や評価などお待ちしております。

火蓋は切つて落とされた（前書き）

いつの間にかユニーク100超えている.....

やつた（小さくガツッポーズ）

火蓋は切つて落とされた

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします」

たいして興味がなかつたので、聞き流していくと自分の番になつたので、立ち上がりて自己紹介をする。

「日本総司だ。趣味は家事全般。嫌いな事は退屈とつくるもの。一年よひじく

そう言つて、わざわざと座る。

……座る時に坂本がニヤリと笑つたのが気になつた。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と読んで下さい」

さつき坂本と話していたバカ面が、なんといつかバカな事を言つたのが、耳に入つた。

『『『ダアアーリイーン！』』』

どうやらこのクラスはかなりノリがいいらしい。

「失礼。忘れて下さい」
忘れるわけがない。

「とにかくよろしくお願い致します」

引きついた作り笑いを浮かべながら、吉井が席に着く。

不意にガラツと教室のドアが開き、一人の美少女が現れた。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしている所なので姫路さんもお願いします」

先生がサラッと遅刻してきた美少女に自己紹介を促す。

「は、はい！姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

やはり姫路さんか、確かに彼女は去年の学年次席だったはず。学力的には間違いなくAクラスに入る彼女がなぜFクラスに？

『はいっ！質問です！なんでここにいるんですか？』

ナイスだ。生徒A。しかし、いきなり失礼だろそれ。

「そ、その振り分け試験の最中、高熱を出してしまって……」

ああ、なるほど。確かに試験途中の退席や試験に欠席すると全科目0点となるんだつけ？ということは彼女は僕と同じ点数というわけだな。妙に親近感が湧く。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

僕の知り合いは簡単すぎたって言つてたぞ？

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて』

『黙れ一人っ子』

嘘つくなよ

『前の晩彼女が寝させてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがと』

流石Fクラス。バカばっかりだ。

「では、一年よろしくお願ひします!」

そう言つて、姫路さんは空いてる席へ向かう。

後で話し掛けるか。そう思い唐突に襲いかかってきた睡魔によつて
意識を手放した。

『『『『大ありじやあつーー』』』』

「つおつー?」

寝ていたら、魂の叫びに叩き起しられる。

「ひ、秀吉。一体何が……？」

比較的に冷静そうな秀吉に現在の状況を尋ねる。

『だらう？俺だってこの現状はおおいに不満だ。代表として問題意識を抱いている』

「なんと言つべきかのつへ..」

『いへり学費が安いからつてこの設備はあんまりだー改善わ要求する』

「わかる範囲でいい」

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりにも差が大きすぎるー。』

「なんとこか雄一のせいじや」

『そりだぞ！』

「なるほどなんか納得した」

なにかやらかしそうな雰囲気を出してからな。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよつと囁く

Fクラス代表の坂本が戦争の引き金を引いた。しばらく楽しめそつだ。

敗北へのフラグに聞こえるのは僕だけなのかな?

火蓋は切つて落とされた（後書き）

感想や評価、アドバイスなどよろしくお願いします！

戦力確認は大事です（前書き）

なんか昨日だけでユニーク100超えているんだが

まじで？

戦力確認は大事です

『勝てる筈がない』

『これ以上設備を落とされるなんて……嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

Aクラスへの宣戦布告。それを聞いたFクラスのだいたいの反応である。…………最後のは違つか。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

そう言つからにはなにか根拠があるのだらう。

『なにを馬鹿なことを』

そう決め付けるのは早いだ?

『できるわけないだる』

やつてみないとわからない

『何の根拠があるんだ?』

お、普通に冷静な奴もいるな。

「根拠ならある。IJのクラスには試験凹喰戦争で勝つIJとのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

Fクラスだぜ?学年最下位クラスにそんな要素あるか?

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「……！（ブンブン）」

恥も外聞もなく覗いてたくせに、顔と手を左右に振り否定するなよ。

「土屋康太。こいつは寡黙なる性職者だ^{ラッシュカー}」

ムツツリーニつて、たしか男子には畏怖と敬畏を、女子に軽蔑を持つてあげられるムツツリストベジやなかつたつけ？

『ムツツリーーだと？』『ヤツがそうだというのかー？』
『だがみる。あそこまで明らかに覗きの証拠を隠そつとしているぞ』
『ムツツリの名に恥じない姿だ』

お前らどこの感心しているんだ？

「？？？」

姫路さんは頭に多くの疑問符を浮かべているが、これは知らない方がいいだろう。

「姫路のことは説明するまでもないだろ。皆もその力はよく知つているはずだ」

元学年次席だからな、有名だらう。

「わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

『俺たちには姫路さんがいるんだ！』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない
『ああ。彼女さえいれば何もいらないな
『いいや』

だれだ？姫路さんにラブコールを送ってるのは？

「木下秀吉だつている」

え？秀吉って有名なの？

『おお……！』

『アイツ確か、木下優子の……』

横田で秀吉を見ると、満更でも無さそつだった。

「当然俺も全力を尽くす」

坂本が自信満々に胸をはる。

『坂本つて、小学生の時は神童とか言われてなかつたか？』
『じゃあ、振り分け試験の時は体調不良だつたのか』
『実力はAクラスが一人もいるつてことだな！』

坂本が神童つて呼ばれたのは何年も前だから信用出来ないと思つがなあ。

「それに俺にこの事を言い出すきつかけになつた奴もいる

『なんだと……？』

『坂本を踏み切らせた奴だと……？』

『だれだ……？』

坂本の言葉に吉井がなんか騒ぎ出しだが、なうんか嫌な予感が……

「そいつは、『疫病神』こと、山本総司だ！」

な、なにいいいいい！？？？？？？

2

あ～あ、言つちまつたね

『疫病神が味方だと……！』

『俺たちの勝ちは決まつたな』

いや、そんな訳ないだろ。

「」での『疫病神』は普通とは意味が違う。

僕を指す『疫病神』は味方また中立なら害はないが、敵に回つたら
さまざまな手段を使い敵を根絶やしにするという噂が流れているん
だ。

実際はそこまでひどくはない。

「坂本、勝手に戦略兵器扱いするな」

試験召喚戦争に参加しないのか？」

クラス中の視線を感じながら、適当に囁く。

「まあ、」この環境はあれだからね。手伝ってくれるにはます。

とつあえずの参加の意志それにクラスは一斉に盛り上がる。

『いよっしゃああああああああ！』

『勝てる勝てるやおーーー！』『俺たちの天下だーーー！』

『俺のモテモテライフの始まりだあーーーーー！』

喜ぶのは早すぎるだろ。最後のに至っては関係ないし。

僕の呆れをよそに、我がFクラスのボルテージは最大まで上がり

「それに吉井明久もいる」

シーン

ゼロに還った。

「雄ーー！僕の名前を挙げる必要はないよねーー？」

「オチなんだろ」

『吉井って誰だ？』

『聞いたことないぞ』

わざわざ自己紹介してだろ？

「折角上がった士気に翳りが見えてるし、ーーなんで僕を睨み付けるのーー？」

こいつ割と面白いな。玩具に決定。

「知らないなら教えてやる。こいつは『観察処分者』だ」

『それってバカの代名詞じゃなかつたっけ?』

「ち、ちが『そうだバカの代名詞だ』肯定すりなバカ雄二!」

僕は横目で坂本が姫路に観察処分者のことを使っているのを見ながら吉井の肩に手を乗せ、

「ドンマイ、観察処分者『バカ久』」

最高の笑顔とともに毒を吐いた。

その結果、バカは教室の隅でいじけてしまった。なんでだろ?

「お主も酷いの……」

「……かわいそつ」

外野が五月蠅いから無視しそう。

「とにかく、俺たちの力の証明として、Dクラスを征服する

「へー」

「皆、この境遇は不満だろ?」

『当然だ!!』

ほぼ自業自得だろ。

「ならば全員ペンを執れ!」

『 むむ―――.』

「俺たちに必要なものはなんだ?」

『 『 『 Aクラスのシステムデスクだ! ! .』』』

Fクラス男子（隅にいるバカを除く）が拳を高く掲げた

クラスの雰囲気に圧されたのか、姫路さんは小さく拳を掲げた。

別に無理に合わせなくともいいのにね。

戦力確認は大事です（後書き）

感想や評価、アドバイスなどお待ち致しております

宣戦布告と死亡フラグ（前書き）

始まります

宣戦布告と死亡フラグ

「明久、隅っこで落ち込んでないでこいつひこ」

しぶしぶといった感じに明久が戻つてくる。

「なに雄一？」

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもうつ」

「今、字が違わなかつたかの？」

「氣のせいだ」

秀吉の台詞に坂本が断言する。氣のせいか？

「……下位勢力の使者つてたいてい酷い目に遭つよね？」

「それは実際の戦争だけだぞ？戦争とはいえ、ここは学校だぞ？そんな事がある訳ないだろ」

「山本の言つ通りだ。騙されたと思つて行つてみる」

吉井は僕と坂本の台詞を反芻してこるよりしづらべブツブツ言つてだが、やがて顔を上げて聞く。

「本当」もちろんだ。俺を誰だと思ってる…………わかつた行ってくる

坂本が力強く断言し、それを信じて吉井はDクラスへ向かった。

「坂本、お前わかつて送り出したな？」

「当たり前だ」

坂本への僕の確認をすると予想通りの答えが返ってきた。

「何のことじや？」

秀吉が疑問に思つたのか、聞いてくる。

「ああ、明久が酷い目に遭つのがわかつて行かせたつてわけだ」「酷いのじや」

「ああ、さつきは援護、ありがとな山本」

「総司でいい。僕は一般論を言つただけだよ坂本」

「雄一でいい、これからもよろしくな」

「ああ、よろしく」

雄一と堅い友情の握手をする。いい友達に成れそうだ。

「最低の友情じやの……」

「…………外道」

そんな事実はない。

雄一とロクラスにどう攻めるか議論していると

「騙されたあつ！」

命からがらといった様子で吉井が教室に転がり込んできた。

「やはりそうきたか」

流石雄一、平然と言い放った。

「大丈夫か吉井？」

「大丈夫じゃない、やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじやないか一人とも！」

「当然だ。予想出来ないで代表が務まるか

「一人とも少しは悪びれられろ！」

なぜ僕まで、ちょっとからかうか。

「吉井、僕はこれは予想外だつたんだぞ？（もつと酷くなると思つてたからな）」

「え？ そうなの？」

「ああ。吉井に（こんなに軽い）暴行するとは思わなかつた」

「ごめん。山本君。さつきは怒鳴つて」

「総司でいい。構わないよ吉井。お互に誤解があつたようだからな」

「明久でいいよ」

「わかつた。明久だな？」これからも（玩具として）よろしく

「よろしく総司」

明久との友情が結ばれた。

「卑怯じや……」

「…………外道」

「ナイスだ」

外野は黙れ

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが吉井に声をかける。

「あ、大丈夫。ほんとくさり傷

「ちつ」

吉井の台詞に思わず舌打ちがでた。

「いま舌打ちしたのは誰だ！といふか雄一貴様だろー！」

「吉井、大丈夫？」

空気を読まずに島田が吉井に話し掛ける。

「あ、うん。平氣だよ」「良かった。ウチが殴る余地はあるんだ」

ヒュー・ヒュー、明久くんモツテモテ

「だめだ！もう死にそうー！」

明久が床で転げ回る。うわー、目障りだー。

「バカはほつといて、今からミーティング行つぞ」

雄二が扉を開けて外に出たので、吉井を踏み越えて「グハーア！？」
ついて行く。

雄二を先頭に屋上にでた僕らはロクラス戦へのミーティングをして
いた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど

「じゃあ、先に昼飯か」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいまともなもの食えよっ！」

うん？明久は昼飯食わないタイプなのか？

「なら、パンでも齧つてよ」

「え？ 吉井船はお腹食べなごひとなんですか？」

姫路さんも同じことを思つたらしく。

「いや、食べてゐるよ」

「……あれは食べるとほにわん

「どうゆうひと？」

「二つの半食はーー水と塩だからな……」

「うわあー

流石の僕もドン引きした

「失礼な。きちんと砂糖だつて食べてるやー。」

「水と塩と砂糖は食べるとは言ひませんよ……」「舐めるが表現として正解じやうつな

「…………よく生きてゐる

「同感だ」

「飯代まで遊びに使い込むお前が悪いな

「自業自得かよ

「仕送りが少ないんだよー」

いや、おまえの自業自得だ。

「……あの、良かったら私がお弁当作つてしまふつか？」

「あ？ 本当にいいの？」

「はい。明日のお昼で良ければ

「ふーん。瑞希つて優しいのね。吉井だけに作つてくるなんて

姫路さんの台詞に面白くなれやつたのは島田だ。

どうやらこの二人は明久にホの字らしい。

「あ、皆さんにも……」「俺たちも？」

「ゴチになります」

「それは楽しみじゃのう」

「…………（コクコク）」

「お手並み拝見ね」

姫路さんのお弁当が楽しみだな。

あれ？なんか明久がアホな顔してる。

「姫路さん、僕、初めて会う前から君のこと好き——「振られたら弁当の話はなくなるな（ボソッ）」——にしたいと思つてました」

明久は変態だった！！

宣戦布告と死亡フラグ（後書き）

いきなりですがオリキャラを募集します。

名前
性別
ビジュアル
性格
その他

この順番で書いてください。

期限は特にありません。

オリキャラは使えそうだったら使います。
皆さん、よろしくお願ひします。

花より団子（色気より食い氣ともこつ）

前回のあらすじ

吉井「僕は姫路さんのこと好きにしたいと思ひます」

「明久。本人の前でよく言えたな」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じやぞ」「僕の判断力のバカ……………」

明久は空に叫んだが、よく見る明久。姫路さんはなんか「吉井君に求められ……はわつ（／＼／＼）」

……なんか頬を赤らめているよ?それに若干取り返しがつかなそうだな。

「お前はたまに俺の想像を超えた人間になるよな」

「だつて……お弁当が……」

「花より団子。色氣より食い氣かよ……」

「……」

「話が「明久のせい」で逸れたな。試験召喚戦争に戻る」

「ちょっと、総司！？なんでそこで僕の名前を出すのさ！？」
「事実だろ」

「雄一。どうしてロクラスなんじや？段階を踏むならEクラスじゃし、勝負に出るならAクラスじゃう？」

「確かにそうですね」

「当然理由はある」

明久が？飛ばしてる。もつついでこれないらしい。

「どんな理由ですか？」

「姫路さん。よく考えてみなよ」

「総司それじゃわからないぞ。まあ、Eクラスと戦わないのは簡単だ。戦うでも無いからな」

「えっ？でも僕らよりクラスは上だよ？」

確かに成績順にクラス分けをしているから振り分け試験の時はうえだつただろう。

「明久。オマエの周りにいる面子をよく見る」

明久がメンバーを見回す。

「え～っと、美少女一人と馬鹿が一人とムツツリが一人と常識人が一人いるね」
「誰か美少女だと！？」
「雄一が美少女に反応するの！？」
「…………（ポツ）」
「ムツツリー今まで！？」「だ・れ・がムツツリだと？」
「総司まで！？どうしよう、突つ込み切れない！」

人をムツツリ扱いするなら、それ相応の罰を与えよう。

「落ち着くのじゃ、代表にムツツリーーーに総司よ

「そ、そうだな」

「明久あとで覚えとけ」

「なんで！？ なんで総司の怒りを買つてるの…？」

「ま、要するに。姫路と総司に問題がない以上、Eクラスには勝てる」

「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

明久はよくわかつて無いらしい。

「明久。試合戦争は成績と戦略がものを言ひ。ここまではいいな？」

「うん」

「僕と姫路さんは万全な状態なら力押しでなんとかなるが、お前らは違うだろ？」

「あ、そっか。僕達は成績的に負けてるから……」

「そういうこと」

「つて総司つて成績いいの！？」

なんだこいつはいきなり。

「基本的に総合は2500ちょいだな」

「Bクラス上位からAクラス下位くらいか

まあ、そんなもんだな。

「振り分け試験受けてたら、Bクラス代表になつてたかも知れない

のか……

雄一が良かつたという顔をしている。どんだけ敵にまわしたくなかったんだよ。

「それじゃ、雄一作戦の方をようじく」

「お前は？」

「今回は補給にまわつておく。振り分け受けないし」「さうか」

僕はニヤッと笑う。

「IJのクラスは強いぜ」

「さうなの？坂本？」

「ああ、いいかお前ら。ウチのクラスは——最強だ」

「いいわね。面白そうじゃない」

「退屈しなさそうだな」

「…………（グッ）」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「頑張ります」

はは。いい感じだ。

「それじゃ、作戦を説明しよう」

屋上で、勝利のための作戦に耳を傾けた。

これから楽しくなりそうだ

花よつ園ナ（色氣よつ食こ飯とむこい）（後輩れ）

まだまだオリキャラ募集中

Dクラス戦開幕（前書き）

主人公あまり出ません。

Dクラス戦開幕

前回のあらすじ

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

こんにちは。只今、化学の補給試験中の山本君です。

今はDクラス戦何だけど、僕は点数がないから参加出来ないんだ。

「次、お願いします」

三つ離れた席で姫路さんも補給試験中です。

……姫路さんの解くスピードが異常なんですが?

僕が今1枚目なのに、彼女に至っては3枚目だよ?おかしくない?

やつやと終わらじて、試合戦争に参加したいーー

s i d e 明久

「木下たちがロクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入つたわよー。」

「ポニー・テールを揺らしながらかけて来たのは副部隊長の島田さんだ（ちなみに部隊長は僕になつてゐる）。島田さんに何かが足りない気がする。」

「何が足りないのだろうか？」

「ああ、胸か」

「小指から順番にアンタの指を折るわ」

「マズい。何かのスイッチに触れたっぽい。」

「そ、それより今の状況はー?」

「今は……」

そう言って、島田さんは渡り廊下の方を見る。ビリヤリ誤魔化せたようだ。

さてと今の状況は……？

『さあ来い！負け犬が！』

『鉄人！？補習室は嫌なんだ！』

『黙れ！捕虜は全員この試合戦争が終わるまで補習室で特別講義だ！』

『見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない』

『拷問？これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬するのは一宮金次郎という理想的な生徒になるだろ』

『鬼だ！誰かたーーイヤアアーー（バタン、ガチャ）』

なるほどよくわかった。

「島田さん、中堅部隊に通達」

「作戦？なんて伝えるの？」

「ゲサッ総員退」

チヨキで殴られた。

「田があつ！」

「田を覚ましなさい、この馬鹿！部隊長が臆病風に吹かれてビリスるのよ！」

その台詞はグーカパーで殴った後に言つて欲しかった。

「吉井、ウチらの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツら

が消費した点数を補給する間はウチらが前線を「島田、吉井前線部隊が撤退を開始したぞ！」——総員退避よ」

途中で言つてゐ事が変わつてゐる。

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「うん。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

Fクラスに方向転換。

するとそこには本陣に配属された横田君がいた。

「？横田じゃない。どうしたの？」

「代表と山本殿より『伝令』があります」

「どうでもいいけど山本、殿、なんだ。

「まずは代表から『逃げたら』『ロス』」

ア、アハハハハ。口口スつて、そんなわけ……。

「山本殿からは『逃げてもいいよ』」

総司君はなんて優しいんだ！

「まだ続きます『メイド服かナース服のどちらかのコスプレかを選ぶ権利位はあるから』」

「全員突撃しろおーっ！」

気がついたら戦場に向かつてダッシュしていた。

これはFクラスの勝利のためだ！

「お？」

今微かに明久の叫びが聞こえた。

どうやら横田君からのメッセージを受けたみたいだ。

「わざわざ終わりますか」

そつ脱ぎながら、問題を解いて行く。

一時間くらいで合流できるかな？

Dクラス戦開幕（後書き）

まだまだオリジキャラ募集中。

喰らえ、ライダーパンチ!!（前書き）

タイトルがあれだね……

食らいえ、ライダーパンチ!!

前回のあらすじ

島田「田を覚ましなやこ、この馬鹿ー。」

びつむ、やつと補給試験が終わって、戦場に出てこれた山本君だよ?
いやー、意外と補給に時間がかかって、困った」と、もつすぐ放
課後なんだよな。

まだ一回も戦つてないから、早く戦いたいな。

そんな事を考へながら、教室に戻ると、

「やれる、僕なら殺れる
「殺るなつての」

.....。

「え？ と、 どんな状況？」

なにがなんだかわからない。

なぜか明久が包丁と靴下（砂が入ってるぽい）を持ってハアハア言つてる。

「雄一何があつた」

「ん？ 総司か。 いや明久が放送を頼んださいに俺が明久が船越先生にラブコールを送ったことにしただけだ」

ああ、なるほど。 船越先生（婚期逃した独身女性）に明久が告白したことになっているのか。

「シャアアアアツ！」

明久が鋭く踏み込みコンパクトに雄一の肝臓へ包丁を突き出し、 同時にブラックジャックもどきを雄一の頭へと――

「あ、 船越先生」

その前に明久が掃除用具入れに飛び込んだ。

「馬鹿は放つておいて、 決着つけるか」

「はいよー」

「…………（「ク」「ク」）」

「そうじやな。 下校しておる生徒も見え始めたし、 頃合じやうひつ」
「Dクラス代表の首を刈りに行くぞ！」

『おうひー』

楽しい狩りの始まりだ。

「あー、明久。船越先生が来たっていうのは嘘だ」「いや、そもそも来たなんて一言もいってないし」

明久にそう言って、教室を出る。

すぐに渡り廊下で交戦に入ったので、すぐに戦うことになった。

適当な生徒に決闘けんかを売る。

「Fクラス山本総司が日本史で勝負を挑む。サモン試獣召喚」

「馬鹿が調子に乗るな。サモン試獣召喚」

お互たがいに召喚獣が出て来る。

相手の召喚獣は軍服にサーべルという格好。

対する僕の召喚獣は流れ者の格闘家のような姿だった。

「馬鹿が勝てると思うなよー!」

そう叫びながら突っ込んで來たので、右に避けて拳を叩き込ませた。が、倒せなかつたようだ。

「なにいつ！」

「こんなもんか」

『Dクラス	斎藤雅人	VS	Fクラス	山本総司
日本史	46点	VS	Fクラス	山本総司

』

思つたより今回は取れたんだよね。

「嘘だろ！？Fクラスかお前は！？」

「Fクラスだよ。不本意にもね」

そう言って、召喚獣の腕に巻き付いていた鎖を振り回し、戦死させる。

「よわっ」

この結果から、驚異だと思ったのか相手の本陣の3人が一気に遅い掛けつてきた。

「えいつ！（ヒヨイ）」

「この！（スカ）」

「おり！（ヒヨイ）」

三方向からの攻撃をメタル ライムの「ごとく避け続ける。

『Fクラスの姫路瑞希です』

『えつ？』

向こうで終わりのフラグがたつたみたいだ。

すぐにDクラスの代表が討たれて、試合戦争は幕を閉じた。

あー、なんだか暴れ足りない。
合計で10人を戦死させた人

『食らいえ、ライダーパンチ!!』（後書き）

オリキヤラはまだまだ募集集中です！

Dクラスとの戦後対談（前書き）

オリキヤラ案がかなりバランスブレイクなんだが……

設定を弄つて使うか。

それではどうぞ

Dクラスとの戦後対談

前回のあらすじ

姫路「Fクラスの姫路瑞希です。試験^{サモン}召喚」

Dクラス代表 平賀源一 討死

その報せを聞いたFクラスの勝ち鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、うざつたい大音響が校舎を駆け巡った。

「本当にDクラスに勝てるなんて！」
「これで畠と卓袱台ともおさらばだな」
「あれはDクラスの物になるからな」

「坂本サマサマだなー!」「坂本万歳!」

「姫路さん愛してますー!」

至る所から雄一を褒め称える声が聞こえる。

毎回思つが姫路さんにラブホール送つているの誰だ?

向こうで明久が雄一に包丁を突き出しだが、あつさう手首を捻り上げられたようだ。

何やつてんだよアイツら……。

あれは放つておいて、Dクラス代表の平賀源一の所へ行く。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられない
振り分け試験中に高熱を出したんだってよ」

ブツブツ言つていた平賀に話かける。

「そうだったのか…………君は?」「

「僕はFクラスの山本総司だ。よろしく」

「山本君だね。なんの用だい?」

「あれも終わったから戦後対談するよ、って

そつとつて雄一の方を指す。

「ああ、わかった

平賀君が雄一のもとへ向かう後について行く。

「平賀、きたか」

「ああ、ルールに乗つ取つてクラスを明け渡そう。ただ「その必要はない」——どうじうことだい？」

「雄一なんで？」

「Dクラスを奪うつもりはないからだ」

「なんで？せつかくの普通の設備を手に入れることができたのに」「明久、目標を忘れたのか？まあ、気持ちはわからんでもないが。まあ、雄一の次への布石だろ？」

ニヤッと笑いながら、話に混ざる。

「総司。よくわかつたな？」

「明久じゃあるまいし「ちょっとどうじうじう」とだよ。——明久黙れ。Bクラス戦の為だろ？」

「Bクラス……。ああ、Bクラスの室外機かな？」

平賀はそこそこ頭がまわるみたいだ。

「ああ、こちらの指示でアレを動かなくしてもらいたい」

「それだけかい？」

「ああ」

「……そつか。ではありがたくその提案を飲ませて貰う」

取引成立。チヨロいね。

「もし、破つた場合『疫病神』が敵にまわるから氣をつけろよ」「待て」「ラッ。勝手に僕を使つな！」

なぜかその言葉に明らかに平賀が引く。

「……す、すまない。君を敵にまわすつもりはなかつたんだよ…」

「……平賀。こつちが仕掛けたんだから、謝らんでも」

明らかに腰が引けてる。

「あー、約束は守つてね?」

「は、はい!」

そう言つて、平賀君は去つて行つた。

帰り道。僕と秀吉は方向が同じなので、一緒に帰る事になつてゐる。

「それにしてもお主は凄かつたのう」

「ど!」が?」

秀吉の凄かつたの意味が分からず首をひねる。

「あの召喚獣の戦いじや

「ああ、あれ」

秀吉が呆れたよつと言つて、よつやく意味がわかる。

「なんで三方向から攻撃されて、ほぼ無傷だったのじゃ？しかも関係無い戦いの敵を倒せるのじゃ？」

「いや、あれの前にある程度、召喚獣の操作を把握したから、出来たんだよ。あと、最初のうちは、よけながら適当に鎖飛ばしたら敵当たつたんだ」

「つまり途中から狙つてやつたのじゃな……」

秀吉は敵でなくて良かつたぞいと黙つて、安堵の息をほく。

「」で秀吉に前から気になつていた事を訊く。

「なあ、秀吉」

「なんじや？」

「なんでお前らは僕が『疫病神』だつて知つても変わらずに接する事ができるんだ？」

僕は疫病神という渾名のせいで、まともな友人ができたことがない。だからこそ、秀吉や雄一、明久、康太が変わらずに接することができるのかがわからない。

「？そんな事決まっておるじやろ」

「？」

「友達だからじや」

わしは「」つちじやからと言つて、秀吉と別れた。

「友達か……」

秀吉が当たり前のようになげた言葉が、自然と口から漏れた。

「ありがとうてくれて、あっがとう」

この日、僕は初めて嬉しさから泣いた。

Dクラスとの戦後対談（後書き）

主人公…………（――；）

オリキャラはまだまだ募集集中です！

朝、新キャラ登場（前書き）

始まります

朝、新キャラ登場

前回のあらすじ

秀吉 「友達だからじや」

「わざわつかな？」

Dクラス戦から一夜明け、登校中にふと、思い立つた。

今日は昨日のDクラス戦で減った点数の補給……要するにテストである。

「まあ、ダメージまったくないから受けなくてもいいんだけどね……」

「…………。」

あれ？ 行く意味無くない？

「……サボるか」

「サボっちゃダメだよ。」

「つ、おひー。」

独り言に応えが返ってきたので、変な声が出た。

声が聞こえた方向を見ると、小柄で小動物のよつたな女子高生^{かわはたるじ}がいた。

「ん？ 驚かすなよ瑠璃」

「驚かしてないんだけど……」

そこには、幼なじみのAクラスの秀才・川端瑠璃^{かわはたるり}がいた。

「なにがあったのかわからないけど、サボっちゃダメだよ。」

「いや、今日は昨日の試合戦争のせいで補給試験受けなきゃいけないからやー。」

おおやいぱに瑠璃に理由を話す。

「試合戦争？ そここえは、総ちゃんはどこの所属なの？」

また、痛いことを

「振り分けの時、いなかつただろ？」

「…………あ」

「ひやひ、忘れてたよひだ。」

「じゃあ、Fクラスなの？」

「そうなるね」

「總ひやんなら、受けたらBクラスには入れたの……」

あれ？振り分け出なかつた理由言つてなかつたつけ？

……まあいいや。

「じゃ、僕はこっちだから」

「あ、うん」

そつ言いながら、瑠璃と別れる。

「おはよー」
『総員狙え！』

ガラツ（ドアを閉める音）

シユカカカ（カッターが刺さる音）

「なんだよ?」

『黙れ異端者ーー』

『女子と登校などうひりやまーー許せない
異端者は死刑だ!』

『これより異端者を断罪するーー』

『ヒヤアハアアアアーー!』

あー、なんのことかわからないが……

「僕に喧嘩売るなんていい度胸だね」

ストレス発散にちょっと 暴れますか。

朝、新キャラ登場（後書き）

次はキャラ紹介でもします。

オリキャラ募集中です。

キャラ紹介（川端瑠璃）（前書き）

このキャラは筆者の考えたものです。

キャラ紹介（川端瑠璃）

川端瑠璃 かわばたるり 女 16歳

見た目

髪型は三つ編みで、体格は小柄で小動物のよつたな印象を受ける。

山本総司の幼なじみで総司を総ちゃんと呼ぶ（昔は総司は嫌がっていたが今は諦めた）。総司に恋愛感情を持つているが、自覚していないっぽい。

どんな科目もこなす秀才で得意な科目はないが英語が若干苦手（それでも300は越えている）。平均340、総合で3500くらい。

召喚獣

中世ヨーロッパのドレスに扇を持つた姿。動きづらそうだが、普通の召喚獣並みには動ける。

キャラ紹介（川端瑠璃）（後書き）

こんなもんかな？

送つてもらつたオリキャラはBクラス戦あたりとAクラス戦で使う予定。

吉井の不幸（自業自得）（前書き）

ダリイ

吉井の不幸（自業自得）

前回のあらすじ

山本「ストレス発散にはちょいびといいや

『異端者め……我らは不滅だ……』
「はい黙れ」

どうもクラスメイトのほとんどを呪きのめした山本総司です。

「お前凄いな……」

なぜか引き気味に雄一が言つ。

「いや、僕は喧嘩は得意じゃないけどね?
「今のお主に説得力はないぞい」

近くにいた秀吉に突っ込まれた。よく見ると、前回の屋上組がよつて来ていた。しかしながら

「僕の戦いは情報戦だからな。喧嘩は基本的に人外と武芸者に任してからなあ……」

「人外はともかく、武芸者ってのは誰だ?」

雄一が興味深そうに聞いてくる。しかし、人外の方を知っているのは意外だ。……なんか勘違いされているような気がするが放つておく。

「武芸者の方は、腐れ縁の一人で倉石黒夜くらじろくやだ。僕はクロクロって呼んでいる」

「ちょっと待て、そいつまさか『暗黒の暴君ブラックキング』か!?」「…………予想外!」

雄一と康太がなぜか驚いたように大声を上げる。

「なによそいつ?」

「ブラックキング?」

女子組は知らないっぽいな。

「『暗黒の暴君ブラックキング』つてのは、一回キレたら、あり得ないくらい怖いことで、不良の間で有名な奴だ」

本人が聞いたら泣くな……。

「まあ、そのせいで周りの怒りが僕に集中して、結果として『疫病神』が誕生したんだがな」

遠い田で、いろいろ省いて説明する。

「いろいろあつたんですね」

「わうじやな……」

「…………不憫」

なんで同情されてるんだ?

たわいもない会話をしていると

『おはよー…………って何事!…?』

明久が登校してきて、クラスメイトの惨状に叫んだ。

その声を聞いて、島田さんがなぜか飛んでいった。

面白そうだから見に行くか。

「吉井つー。」

「うふあー。」

お、島田の右ストレートが明久を吹き飛ばしたな。

「島田さんおは「おはようじゃないわよー。アンタ昨日のことを忘れたわけじゃないわよね?」——はい」

なにがあつた?

「山本！吉井は昨日はウチを見捨てただけじゃなく、消火器のイタズラと窓を割った犯人に仕立て上げたのよ！おかげで彼女にしたくないランキンギングが上がったじゃない！」

どうやら、声に出てたらしく、島田が教えてくれた。ていうか、ランキングに入つてたのか？

「明久」

「な、なに総司？」

「骨は拾つてやる」

「僕は死ぬの！？」

死ぬだろ？ 島田じゃなくて、あの人で

「本当なら、ここで掴みかかるんだけど」

殴り飛ばしたけどな。

「十分、罰がくだつたみたいだし許してあげる」

「うん。いま鼻血が止まらないんだ」

勘違いしてるっぽいな。

「そんなもん気にならなくなるぞ」

「今日の補給試験の監督船越先生だつて」

明久は島田の言葉で、全速力で逃げ出した！

「吉井君どこへ行くのですか？」

しかし、回り込まれてしまった！

「吉井の運命はいかに？』

「お主は楽しそうじゃの……」

当たり前だ

吉井の不幸（自業自得）（後書き）

倉石黒夜は黒炉さんのアイデアです。
まだ出てないけどね。

山本「ちなみに人外もオリキャラだ」

うん。いきなり出でくるな。

山本「しかし、無駄に複線はつたな……」
気にするな

楽しいお弁当タイム？（前書き）

だるー

楽しいお弁当タイム？

前回のあらすじ

雄一「『暗黒の暴君』だと…？」
ブラックキング

「うあー、づがれだー」

現在は四教科が終了したついで、明久の声が聞こえた。

残念なことに、明久は船越先生に捕まつた後、近所のお兄さん？を紹介して誤魔化した。

「チツ」

「総司なんで舌打ちするの？」
「気のせいだ」

適当に明久を弄つていたら、雄一がこひらてきた。

「よし、昼飯食つに行くぞー。今日は『姫路さんのお弁当』——あ

うん。忘れてたな」と。

「姫路さん、家に忘れたとか言わないでね?」

「ちゃんと持つてきました!」

姫路さんも好きな人に食べてもうれるからか、至福の顔をしている。

「せつかくの(+)馳走じゃし、屋上でも行くかの(+)」

「せつだね」

この衛生面最悪の教室よりかは、屋上の方がましだろう。

「そうか。お前らは先に行つてくれ。ジュースでも買つてくれる

「あ、ウチも行く! 一人じゃ持ちきれないでしょ?」

「じゃ、頼む」

「ああ」

雄一たちと分かれで、屋上へ向かつ。

「天気が良くてなりよじや」

「シートもありますので……」

姫路の持つシートを屋上に敷き、ワイヤレスと準備する。

「あまり自信は無いんですけど」

「…………おおー！」

姫路さんは自信なさげだったが、見た目はとても美味しいそつだった。

「それじゃ、雄一には悪いけど——」

「…………（ヒヨイパク）」

「いただき」

「あ、ずるいぞムツツリーー」と総司

明久のセリフを聞かずに 姫路の料理を口に運ぶ。
そこで意識が暗転した。

「あ？」

なんの前触れもなく、意識が戻った。

「あ、総司起きた？（大丈夫？）」

「ああ」

若干フラつぐがどうつてことない。

「どうだつた？」

「どうつて……（なにがあつた？）」

「あははは姫路さんの料理だよ（食べたら倒れたんだ）」

普通の会話と同時にアイコンタクトで状況を聞く。

島田はいなが雄一がいるから、大体5分くらい意識がなかつたっぽい。

「姫路」

「何ですか？」

「お前の料理クソマズい」

はつきり姫路に言つ。

「え……？」

「ちょっと、姫路さんに失礼じやないか！？」

姫路が傷ついた顔をするが明久のせいでもつと悪化した。

「黙れ明久。姫路味見したか？」

「いいえ、でも！わた「黙れ」

久々に頭にきた。

「姫路。なぜ味見をするか、知っているか?」

「料理の味を確認するためです」

「……………」
知っているのら、なぜ味見をしない?」

「味見すると太るからです!」

「味見程度で太るか!!!」

この後しばらく話が平行線になり、やや冷静になつたのでアプローチを変える。

「姫路」

「何ですか?」

「味見は最終確認だ」

「最終……確認?」

「そうだ」

ここでひとつ例え話をする。

「例えば好きな人に料理を披露するとしよう」

「はい」

「その人は味見をせずに料理を好きな人に出しました」

「それでどうなつたんですか?」

話の内容が内容だからか、姫路は真剣な表情だ。

「結果はその人は振られた」

「何ですか!?」

「まづかったからさ」

「え?」

「もつ」押しかな。

「その人は作つてもらつた料理のマズさに驚いて『こんなマズいもの作る人と付き合いたくない』って言われてな」

「そんな……」

「その人が作る料理はいつもは美味しかったんだ。でも砂糖と塩を間違えたことに味見をしなかつたから気付かなかつたんだ」

「…………」

姫路はうつむいてなにかを考えている。

なにかを考えているのだろう。

「（今は大丈夫だけど、次は嫌われるかもよー）」

「！！」

姫路が焦つた顔をしたので、もつといいだるつと思つて、階段へ向かう。

「『もつ』行くんだ？」

「購買はなにもないだろつから、コンビニでパンでも買つてくれる」

もつ言いながら、あつさつと屋上を去つた。

「似合わない」としたな

自分らしくない。

他人に説教なんて本来の人格じゃ、ありえない。

「あいつらの影響か？」

かもしれないな。馬鹿らしいが、ありえなくもない。

少しづつだが自分も変わっているのだろうか？

楽しいお弁当タイム？（後書き）

最後がいまいち。

山本「僕のキャラブレまくつてない？」

氣のせい（汗）

山本「ふーん」

オリキャラはまだまだ募集中です！

山本「逃げたな」

楽しいお弁当タイム? 2 (前書き)

それでせどり

楽しいお弁当タイム？2

前回のあいすじ

山本「…………ならなぜ味見をしない？」

サイド明久

総司がいなくなつた後、迂曲左折あり、試召戦争の話になつた。

「どうしてBクラスなの？田標はAクラスなんでしょう？」

島田さんの質問に雄一が答える。

「正直に言おう。どんな作戦でも、いつの戦力じゃAクラスには勝てない」

雄一らしくない降伏宣言。だが、無料もないだろ？

Aクラスの生徒のうち、40人はBクラスより少々点数が上の普通の生徒だ。

でも、残り10人がヤバい。おそらく1対10で奇襲が成功したとしても、恐らく返り討ちに遭うだろ？ そのくらい、次元が違う。

「最終目標はBクラスに変更つてこと？」

「いや、Aクラスだ」

「雄一、言つてることが違うじゃないか」

「雄一の言つ通り、クラス単位じゃ勝てないだろ？」

「ンビーの袋を下げる総司が戻ってきた。

「どうじつこと？」

「クラス単位では無理だが、一騎打ちに持ち込むんだ」

そのまま座り込んで、買ってきたパンをみんなに配る。

「なんで？」

パンを食べながら、総司にきく。

「明久少しは考える。この場にAクラス代表に勝てる可能性のある人物がいるだろ？」

Aクラス代表に勝てる可能性のある人物……？

「もしかして姫路かの？」

「ピンポーン」

確かに姫路さんなら、勝てる可能性がある。去年の学年次席だし。

「総司。一騎打ちするのは姫路じゃない。俺だ」「は？」

雄一の言葉が意外だつたのか、総司が変な声を上げる。

「なんで？」

「俺がなんとかする」

どうやらまだ策を明かさないつもりしへ、そこなる言ふ方をする。

「……構わんがミスるなよ？」

「しねえよ」

総司と雄一が軽口を叩くつて事は、次も大丈夫だろ？。

「明久、今日のテストが終わつたら、Bクラスに宣戦布告して来い」

前言撤回、大丈夫じゃなさそうだ（僕の身が）。

「断る。雄一か総司が行けばいいじゃないか」

「んー、行つてもいいけどき使われるのもなー」

「それなら、ジャンケンで負けた奴が行く、でいいな

「心理戦あり？」

「ありだ」

心理戦つて、なにかを出すか言つて、裏をかくのかどうかってやつ。

面白そうだ。

「わかった。それならなら、僕はグーを出す」

「なら俺（僕）は——」

「お前がグーを出さなかつたらブチ殺す（在学中に彼女できないようにする）」

なにその心理戦！？

「ジャンケン」

「わああっ！」

パー（雄）と総司

グー（僕）

「決まつたな」

「行つて来い」

「嫌だ！ ていうかさつきの脅しは酷いじゃないか！」

「明久はDクラスみたいに殴られるのを心配してるので？」

「それもある！」

「（ほかになにがあるんだ？）大丈夫だ。Bクラスには美少年好きが多いらしい

「なら安心だね！」

「（乗せやすいな）ああ、そうだな」

「でも、お前不細工だしな……」

「365度、どこから見てもイケメンじゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度つてこと？」

「一人なんて嫌いだ！」

1年の365日と混ざつただけなのが、馬鹿にしてー。

「とにかく頼んだぞー！」

「頑張れよ～」

雄一と総司の言葉を背に毎食はお開きになり、テスト漬けの午後が始まった。

楽しいお弁当タイム？2（後書き）

次はBクラス戦入ります。

オリキャラはまだまだ募集中

Bクラス戦開幕！（前書き）

始まり始まり

Bクラス戦開幕！

前回のあらすじ

山本＆坂本「お前がグーを出さなかつたらブチ殺す（在学中に彼女ができないようになります）」

テスト受けなくても、良かつたけど、流れ的に受けてしまった山本だよ～。

前回から一日が過ぎ、Bクラス戦前の代表の激励タイムだよ～。

「さて、皆、総合科目テスト苦労だった。午後からBクラス戦だが殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

モチベーションがまつたく下がらない。これはFクラスの一つの武

器だな。

「今日は敵を教室に押し込むことが重要になる。絶対に渡り廊下戦は負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「前線部隊は姫路・山本が指揮を取る」「が、頑張ります」

「野郎共、姫路のためにきつちつ死んでいい！」

『つおおーっ！』

士気は最高潮まで上がる。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了の鐘が鳴り響く。Bクラス戦開幕の合図だ。

「行くぜ野郎共、目指すはシステムテスクだ！」「サー、イエッサー！」

僕らは全力でBクラス戦へ向かう廊下を駆け出した。

さあ、Bクラス戦の始まりだ！

『いたぞ、Bクラスだ！』
『高橋先生を連れているぞ！』
『生かして帰すなー！』
『おおーっ！』

だが、所詮はBクラスとFクラス点数差は3倍近くある。

きちんとフォローをいれないと、戦力が激減されてしまう。

「クロはBクラスに入つたんだな？あ、二人やられた」
「ああ、そうだ。しかし、総司がFクラスつていうのが驚いたぞ。お、こっちも一人やられた」
「クロはこれに参加しないのか？あ、また一人やられた」
「ああ、あのクソ野郎の為に戦いたくない」
「クソ野郎つて？また一人やられた」
「ウチの代表は根本のゴミ野郎だ。お、こっちも一人やられた」
「あー、そう言つことか」

『『『お前ら、戦えよ！』』』

和やかにクロと談笑していたら、戦場の全員から突つ込まれた。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、ん、なさ、い……」

「気にするな姫路さん。野郎共についてこられなくて当然だ」

姫路さんの謝罪に軽くフオローを入れておく。

『來たぞ！姫路瑞希だ！』

「あれ？姫路さんってFクラスなの？」

「ああ、振り分け試験を途中退席したんだと」

同じ部隊の明久が姫路さんを前線にたたせる。

「試獣召喚」
〔サモン〕

あ、姫路さんの召喚獣が腕輪している。

「姫路さん、腕輪持ちか……」

「クロも腕輪持ちだろうが」

腕輪はたしか400点を越えた召喚獣のみ持っている特殊装備だ。

姫路さんの召喚獣が放った一撃で、Bクラスの一人が戦死した。

「名付けるなら『熱線』ってところか？」

「そのまんまだな」

姫路さんが一撃で敵を葬った為にBクラスの連中に衝撃がはしる。

「み、皆さん、頑張つてください！」

「ここで頑張つたら姫路さんからの評価が上がるかもよ?」

『やつたるでえー!』

『姫路さん最高ー!』

姫路さんの指揮官らしくない指揮と、僕の眩さにFクラスの士気は止まることを知らないかごとく上がりまくる。

「振り分け出なけりや良かつたな……」

「なんで?」

「いや、Bクラスのクソ野郎のもとより、Fクラスの方が楽しそうだ」

そういえば、こいつ卑怯者が大っ嫌いだつたな。

『中堅部隊に入れ替わりながら後退! 戦死するなよ!』

相手側の指示が聞こえてくる。

「じゃ、そういうことだから」

「なんかあつたら教えろよ~」

軽口を叩きながら、クロはいなくなつた。

あいつ戦つてないよな?

「総司! Bクラス代表は根本らしい。念のために教室に戻るぞい!」

秀吉がなんかよんでもるから、ちょっと教室に戻りますか。

Bクラス戦開幕！（後書き）

『暗黒の暴君』^{ブラックキング} 登場！

山本「それクロは嫌つてゐからやめな

蔵石君は根本が嫌いなため活躍はしませんでした。

山本「率先して根本を狩りにいくようなやつだしな」

オリキヤラはまだまだ募集中だよ。

山本「予想よりもかなり少ないからな

次回もお楽しみに〜。

根本の策略（前書き）

なんかなあ。

主人公が
…

根本の策略

前回のあらすじ

蔵石「Fクラスの方が楽しそう」

「……うわ、酷い」
「ひひ来るとはひ」
「卑怯、だね」
「だけど、的確な嫌がらせだな」

教室に引き返した僕らは、穴だらけになつた卓袱台とへし折られたシャーペンと消しゴムだった。

「これじゃ、補給もままならない」
「地味じやが点数に影響ができるのひ」
「根本つて、器小さいな」
「気にするな。修復に時間は掛かるが、作戦に影響はない」
「雄一がそう言つならいいけど」

明久がなにか釈然としなさそつた表情をしている。なにか引っかかるつているのだらう。

「雄」「Jの様子だと教室にいなかつたのか?」

「ああ、Bクラスと協定を結ぶために教室を空にしていた」「協定じやと?」

「4時までに決着がつかなかつたら、戦況をそのままに明日の午前9時に持ち越し。その間試召戦争に関わる一切の行為を禁止するつてな」

「僕らに有利だな……」

……なんだかなにかの仕掛けにしか感じられない。

「承諾したの?」

「そうだ」

「体力勝負に持ち込んだ方がウチらは有利何じやないの?」

「他はともかく、姫路さんが持たないと思うが?」

「あ、そつか」

考えてもいなかつたらしい。

ここから作戦とか僕らに丸投げしそぎだ。

「今日は相手側を教室に押し込んだら終了になるだらう。作戦の本番は明日になる」

「Jの調子だと決着は無理そうだね」

「つーか、クラス全体より姫路さんの方が重要つていうのはヤバいな……」

「どうじつこと?」

「もし姫路がやられたらどうする?」

また考へてもいなかつたらしい。

本当に大丈夫か？

「でも姫路さんは点数が高いから大丈夫じゃない？」

「いくら姫路でも補給無しに連續で戦つたらいつかは戦死するぞ？」

「だから受けたの？姫路さんが万全の状態で勝負出来るように」

「ああ、この協定はかなり都合がいい」

「なんか引っかかるがな」

ちょっとと、調べるか。

「雄一、きになることがあるから、ちょっとと調べてくる。明日から本格的に参加する」

「……わかった。気になることがあつたら知らせや」

「はいよ」

そう言ひて、教室をでる。

ついでにこういふ確認しますか。まずはBクラスの周辺からかな？

しばらく、こそそと調べものをしているうちに休戦に入り、蛇足
だが調べものを始めたことにした。

「やつぱ、Cクラスかな？」

ちょっと気になる噂が聞こえたので、一応確認しておこう。

Cクラスに向かつ途中で雄一達に出くわした。

「あれ？ 雄一達何事？」
「総司か、ちょうどいい。Cクラスに行くからついて来てくれ」
「？ いいけど」

そつして、僕を加えた7人でCクラスに向かつことになった。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。Cクラス代表「あれ？ 根本じゃん。
なんでここいるの？ ここCクラスだよね？」

教室の奥にいた根本と田代が合つたので、話し掛けてみる。

「なんでBクラスの君がどうこういんなとこに？」

明久空氣読め。

「（ナイスだ総司）Cクラス代表に挨拶をしにきた」

「代表は私よ。挨拶？」

「ああ、この先にいろいろあるだろ？ からな。 よろしく」

「そう。 ジョリジョリ」

Fクラス代表とCクラス代表の（たしか）小山さんの握手がかわさ
れる。

「それじゃあ、サヨナラ」

「ええ。 サヨナラ」

「ちょっとゆう（ムガツー）」

明久の口を塞いで、Cクラスからである。

「総司ーなにするんだよー」

「お前があそこで余計なことを言つたら、根本は『試召戦争に関す
る一切の行為の禁止』を盾に袋叩きにあつた」

「えー？」

「ああ、総司助かった」

「どうも。僕もこれで確信は深まつたしな」

そういうと言つた台詞になぜか皆の注目が集まる。

「なに？」

「なんの確信が深まつたんだ？」

「んー？」Cクラス代表の小山が根本と付き合つているつてこいつ噂

『なにいー』

「おお、バッタリした！」

「それは本當か？」

「おそらくな」

お前ら二人ともとなんど根本がとか言つた。

「じゃあ、僕は用事あるから帰るな」

「ああ、じゃあな」

るーて、帰りますか。

根本の策略（後書き）

次はちよつとした蛇足になります

キャラ紹介＆蛇足（前書き）

読まなくても影響はないはず。

キャラ紹介&蛇足

黒石黑夜 くろいしのよ 男 17歳

家族構成

祖父 父 母 妹

家が（総合格闘技の）道場なので、ほぼ毎日祖父にしごかれている。

見た目

黒髪が少し伸びている。瞳の色は黒。身長は180cm

ゲームと料理以外には無関心。誰かの為に一生懸命頑張る人が好き。嫌いなものはピーマンと卑怯者と小心者。

その他

成績は日本史、世界史、現代社会限定で腕輪クラスの400オーバー。それ以外は平均80～100点。総合は2000前後。

キレた時の攻撃性の激しさから、『暗黒の暴君』ブラックキングと恐れられている。

ちなみに中学時代には悪鬼羅刹（坂本雄一）とよく喧嘩してたらしい。

本人曰わく、道場の影響でどんな武器でも振り回せるらしいが本當かどうかは不明。

提供者 黒炉

あの後のクラスにて

「ちつ、気付かれちまつたか」

「残念ね」

「いや、そうでもない」

「？」

「元々この策はFクラスの代表を上手くいって首を取れるくらいにしか思ってなかつたからな」

「そうなの？」

「当たり前だ。第一、BクラスとFクラスが戦つて俺が負けると思うか？」

「思わないわね」

「だろ？だからこれは運が良ければ戦争が終わるくらいの意味しかない」

「でも、Fクラスにあの姫路さんがいるわよ？」

「それについても心配ない」

「どうして？」

「『『』』れ』があるからな」

「手紙？」

「ああ、姫路が書いたラブレターだ」

「恭一ー？」

「なんでそんな怖い顔をする…？俺宛てじゃないぞ…」

「そうなの？」

「ああ、中はFクラスのバカの名前が書いてあった」

「……もしかして」

「恐らくそれだ。姫路の性格からして『『』』れ』を試合戦争中に見せつけたら、姫路は使い物にならん」

「それは大きいわね」

「ああ、この紙切れで姫路が無力化出来るんだ」

「恭一ー明日は勝ちなさいよ」

「当たり前だ」

一部始終を聞いちまつたな。

あのクソ野郎そんな手を使いつもりか！

今すぐあいつを殴り倒したいが、それだけじゃ収まらない。

あいつの力を借りるかー

『もしもし？クロから電話なんて珍しいな？』

こんなときに頼りになりるのはこいつだけだ。

「こきなりで悪いが総司。実はーー」

キャラ紹介&蛇足（後書き）

蛇足だな……。

山本「僕の出番まったくないんだけど?」

気にするな。

山本「根本と小山の出番の方が多いのが気に食わん!」

Bクラス戦で発散しな。

どんな事でも仕込みは大切だよ！（前書き）

仕掛けの一部を紹介します。

どんな事でも仕込みは大切だよ！

予想外に早く目的を達成したので、帰るか遊ぶか迷っていると懐の携帯が震えた。

取り出して確認すると、珍しい人物から着信があった。

「もしもし？クロが電話なんて珍しいな」

『ああ、総司。実はあのクソ野郎が姫路を無力化する方法を聞いちまつてな……』

「姫路を無力化？」

『ああ、なんでも姫路の書いたラブレターを盗んだらしい』

「よくそんなの知っているな？」

クロのことだから、偶然聞いたんだろうけど。

『実は帰ろうとしたらクソ野郎とその彼女——あ、小山の事だ。でその会話が聞いちまつてな……』

やつぱ、根本と小山は付き合つているっぽいな。

「ふーん」

『ふーん、つてなんだよ！』

『いや、あまりにも予想通りだつたんできょつと呆れてた』

『今から殴りに行くぞ？』

『ごめん彼る。で、どうしようと？』

『あのクソ野郎をぶつ飛ばしたい』

『すればいいじゃん』

『アイツの事だ。ぶん殴つたらそれを口実に何かされると違いない』
「有り得なくもないね」
「こつもんのへりこは考へて動くよつになつたんだな。

『総司。頼む！』
「はあー、わかつたよ」
『本当か！？』
「んで、報酬は？」
『えー？えーっと』
『ないの？』
「ないの？』

いへりクロでも、ただ働きをやられるのは割に合はない。

『ちよつとまて。えーっと……………あ、あのクソ野郎を好きに
していいぞー』
『クロに都合が良すぎるとあんなのこりがねえ』
『じやあ、じやあ、じやあ、じやあ、じやあ』
「僕に訊くなよ」
『しかしなあー』

困った様子のクロ。しかし、報酬なしないの件は無し。

あ、そりだー

「クロ。ちよつと聞くが根本と小山は付合つてこるのが？』
『？ああ、そりだが？』
「なり、あこつの絶望面でいいか

根本の絶望面。うん。面白そりだ。

『？小山か？』

「いや、根本」

『よくわからんが受けてくれるのか？』

「ああ、でもクロにも動いてもらつよ？』

『どんな事でもするぞ！』

「男にその台詞聞かされたくなかったな……』

『そんな事どうでもいい』

「はいはい」

『こいつ本当に単純つていうか純粹つていうか。なんとか子供っぽいな。』

『で、どうするんだ？』

『んー？FクラスがBクラスに勝つ』

『確かにそれもいいが――』

『いいのかよ』

『ウチのクラスには身体が弱い奴がいるかもしれないから』

クロはいい奴だな。だが――

「その心配はいらん」

『なんでだ？』

『設備交換はしないからだ』

『？なぜだ？FクラスはそのためにBクラスに試召戦争を仕掛けたんじゃないのか？』

『いや、ウチのクラスの目的はAクラスの設備だからな。下手に設備交換したら士気が下がる恐れがある』

『？なるほど？』

『わかつたふりするな。しかしBクラスの試召戦争のモチベーションは違うだろ？』

『ウチのモチベーション? Fクラスの設備になりたくないってことか?』

「その通り。それを利用する」

『どうこう風に？』

少しは自分で考えろよ

『Fクラスの目的を僕がBクラスに流す』
『総司が?どうやって?』

「いや、普通にBクラスの

『Bクラスにそんな知り合いがいたのか……』

「各クラスに3人は情報提供者がいるぞ?」

『なんでいるんだよ！？』

いや、普通そんな知り合いがいるだろ？

人の取り巻きとか、噂好きとか、金で雇つた奴とか、脅した奴とか

■ ■ ■ ■ ■

『後半一つはおかしいだろ！』

「お前は出てた？」

たた漏れた

「あ、それで僕が田舎の目的をながすか」「——『流しやがつた。で俺はどうするんだ?』

「フローティング」の形態について論議

伏せとけ、あとのためにな」

「それだけか?」

うん。他の根回しは僕かしておくから

ああ、わが二た

『ナシキュー』総同上

サンキュー総司!

「せこせこ」

通話を切る。

「やる」と玉来ひまつたな……」

が、楽しそうだからこいけど。

「仕込みはあらへんとしないこと、メインが面白くないからな」

れども、地味にやして確實に仕込んで、

「根本の土台をぶつ壊すか」

その為にはまず電話だな。

「もしもじへりゅうと耳寄りな情報があるよへ。」

どんな事でも仕込みは大切だよ！（後書き）

どうでしょ？

山本「今日は悪巧み編か？」

まあ、そんな所。

山本「疫病神本領発揮はまだまだ先になりそうだな」
これって、疫病神の設定が薄くなりがちだったから入れた話なんだよ？

山本「作者の軌道修正か」

事実だがいうな！

山本「はいはい」

コホン。オリジナルキャラクターはまだまだ募集中です。

山本「もしかしたらあなたのキャラがでないかも？」

いや、そこはてるかもだろ？

山本「いや、これ見る人少ないし。キャラ送つてくれる人はもつと少ないし」

だから、っていうな！

コホン。オリキャラは感想と共に送つてくださいー！

山本「あなたのオリキャラをお待ちしております」

失敗

藏石「あのクソ野郎を殴り倒したい」

「なあ雄二」

「なんだ」

「何で昨日Cクラスに行つたんだ？」

一夜明けて、教室で雄二を見つけて、昨日聞いて無かつたことを聞いておく。

「ああ、Cクラスが試召戦争の準備をしてるって聞いてな

「それで同盟でも結びに?」

「ああ、罷だつたけどな」

「……昨日僕が根本に気づかなかつたら、ヤバくなかった?」

「まあな、Bクラスに協定を盾に攻撃されただろうな

「だよね?」

偶然気付けて良かつたな。

「で、雄一の事だから何があるだろ?」

「……お前は何かしないのか?」

「ん? 根本を貶める仕込みをしたくらいかな?」

「根本を?」

「でもそれにはFクラスの勝利がある程度必要なんだよね」「なんで今回に限ってそんな事を?」

「いや、Bクラスが勝つたらあいつ調子に乗りそうだし」「それを防ぐためか?」

「半分正解」

「残り半分は?」

雄一が怪訝そうな顔をする。

「あの野郎の惨めな姿つていうのが面白そうだから」

「……」

「なんだよその怪訝そうな顔は?」

「なんでもない」

いや、なんかありそうな顔してたぞ?」

「昨日言つていた作戦を実行する

僕を無視して教室の壁にさう言った。

「作戦? でも開戦はまだだよ?」

「明久Bクラスにじやないぞ?」

「へ?」

「Cクラスだ」

「なるほど。何をするの?」

「秀吉にコイツを来てもらひ

「提供は康太かな」

「…………（「クリ）」

雄一の取り出した女子の制服は康太が提供したらしい。

なぜ持つている？

「別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

「構わないんだ……。確か秀吉の姉つてAクラスだよな？」

「ああ、秀吉にはAクラスの使者を装つてもらひ」

秀吉にできるのか？

「秀吉。これに着替えろ」

「うむ……」

秀吉が生着替えを始める。

なんで秀吉は（無意識っぽいが）色っぽく着替えるんだ？

「…………（パシャパシャパシャパシャー）」

そして康太なぜ秀吉の着替えを凄い早さでカメラのシャッターを切つているんだ？

「よし、着替え終わつたぞい。ん？ 皆どうした？」

気がつくとFクラスのほとんどの男子が鼻血を噴いて倒れ、女子は膝について落ち込んでいる。

「さあな？」

「クソツ！ 秀吉に見とれかけちまつた！」

「？おかしな連中じゃの」

「んじや、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「はいよ」

「あ、僕も行く！」

Cクラスへ向かうのは雄一、秀吉、僕、明久の4人のようだ。

「ここからは一人で頼むぞ秀吉」

「Aクラスの使者だから、Fクラスの僕らは一緒に行けないからね」

「面白くしろよ」

秀吉は僕らの激励（？）を受けて、Cクラスへ向かう。

「雄一、秀吉は大丈夫なの？」

「多分大丈夫だ」

「心配だなあ……」

「秀吉が教室に入るよ？」

「明久静かにしろ」

ガラガラガラガラ、秀吉がCクラスの扉を開け、

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

「うわあ。これ以上はない挑発だね……」

「流石秀吉」

「秀吉最高ッ（笑）」

ダメだ、笑いが止まらん。

『な、何よあんた！』

『話しかけなして！豚臭いわ！』

『Aクラスの木下ね?なんのよつよー.』

『私はね、こんな醜い教室があるのが

んて豚小屋で充分だわ!』

「豚小屋ツ
（笑）」

雄
一

「氣持ちはわかるが無視しそう

我慢できなかつた。

「クラスから小山が飛び出してくる。」

とつさに雄一と明久は隠れるが、爆笑中じや動けない。

「あんたは昨日の……！」

あひ、あひひひひひひひひひ（爆）

「
た
い
」

「あんたはFクラスだつたわよね?ってことは——」

「？」

あ、秀吉状況がわかつてない。

「あんたFクラスね！？」

「む。バレてしまつたかの」「

「いや、ひ、秀吉。そこは、『ま、かたないと』」

「あ

「やつぱつやうねー。」

あーあ、やつぱつやつた（笑）

失敗（後書き）

山本「やつぱ、キャラがブレてるな……」

同盟

前回のあらすじ

秀吉 「薄汚い豚ども！」

「あーあ、笑つた笑つた
「流石に笑いすぎじゃやろ…………」

地味に酷いな秀吉。

「貴方達、Aクラスと私達をぶつけたかったみたいだけど、残念だ
つたわね
「そうでもないけど？」
「どういふことよ？」
「いや、もし誰も秀吉の事を見抜けなかつたら、そのままAクラス
にぶつけたがな」

「へ.どうこ.う事じや？」

「まあ、話はクラスの中でしょりよ。Bクラスに見つかつたら面倒だ」

「なに言つてゐのよ？私達はBクラスと同盟を結んでいのよ？」
「表面上はな。明久、雄一ちょっと来い」

明久と雄一を呼ぶと渋々いつた様子でやつてきた。

「おい、総司！計画が駄目になつちま」「説明してやるからCクラスに入れ——納得できるんだろ？」「

「納得しろ」

そう言つてCクラスに入り、話し合いを始める。

「その話私達になんのメリットがあるのかしら？」

「ん？Bクラスの設備が手に入る」

「な——！」

「雄一。僕らがBクラスに勝つたりどりするんだ？」

絶句している小山をほつといて、雄一に話をふる。

「……Bクラスに勝つたら設備に手を出さないで、Aクラスに試合戦争の準備が出来てゐると言わせる」

雄一も僕の考えが読めたのか、渋々話す。

「それだけなの！？」

小山が信じられないと言つ顔をする。

「そうだよ？」

「待つてよ雄一！それってまた？」

「ああ、Bクラスの設備を奪うのもいいが、俺達の目標はAクラスだ」

「仮にBクラスを奪つたらAクラスに勝つための手段がなくなる可能性があるからね」

「そうじゅつたのか……」

小山も納得したように頷く。

「でもCクラスの代表とBクラスの代表は付き合つているから、それは駄目なんじゃ……」

「ああ、それなら大丈夫」

「なぜじゅ？」

「ん？ 気づいてないのか？」

「根本と小山は付き合つてないから」

「「「なッ！」」「？」

「えー？ 昨日総司は付き合つて言つてたな？」

「言つてないし」

「……確かに、確信を得たつて言つてたな」

「それつて小山と根本が付き合つてないっていうことのかの？」

「ああ、正確には根本が付き合つてていると思い込んでいるだけだな」

「……よくわかつたわね？」

「一応聞くが根本の事どう思つてる？」

「総司。それつて聞いたじゃ駄目なんじゃ……」

「あいつのことは嫌いよ

「だろうね」

「のう、総司。どうして確信が持てたのじゃ？」

「昨日確信を持てたのは小山が僕が根本を見つけた時、心なしか安堵してゐるみたいだったからね」

「そうだっけ？」

「いや、皆根本と僕に注目してたからな。気づいたのは僕くらいだと思う」

「ところで、なんで私達に話を持ちかけたわけ？」

「秀吉の演技に気づいていたのがいたから」

「うむ。いたの、わしに疑いの目を向けていたのが」

「教室から離れていたのによくわかつたね？」

「扉が開いてたから、気づいた」

そこで僕の考えを完全に読み切った雄一が話を進める。

「で、Cクラスはこの取引を受けるか？」

「CクラスはBクラスの設備を手に入れて、Fクラスに攻め込みまい。つてところかな？」

小山は考へ込んでいる。

「……それ以外に何かあるわね？」

「あるっしゃ、あるが根本と付き合つてないから頼むぞ？」

「どういう事？」

「根本を貶める。そのそこに思いつきり振つて欲しい

「いいわよ

「どうやつてふるの？」

「Fクラスに負けたからで十分でしょ？」

「いや小山、ふるための材料は用意するから、それで振つてくれ

「雄一？」

「あ、これからのためにもいってきあいをしなきやね」「わかつたわ。」の同盟は受けけるけど、それって貴方達が勝たなきや成り立たないわよね？」「

「大丈夫だ。疫病神がいるからな」

「雄一、勝手に僕を使うな！」

Cクラスに戦慄が走る。

「あー、大丈夫だ。喧嘩を売らない限り」こちからはなにもしない
「疫病神がいるなら大丈夫ね……」「同盟は成立だな」「ええ、よろしくね」「おい、てめえ」「そろそろBクラス戦だから行くぞ」「ああ、そうだな」「なんか釈然としねえ」「遅れるぞい」

口々に言いながら、Cクラスを後にする。

『疫病神を敵に回さずに済んでよかつた……』
『敵になつたらヤバかつたな……』

去り際にそんな声が聞こえた。

Fクラスに向かう途中に明久が声をかけてきた。

「さつきの同盟って必要だつたの？最初の雄一の作戦の方がよかつたと思うんだけど？」

「いや、あれはその場凌ぎの策だからな。後で確實にバレる」

「でもCクラスがAクラスに負けたら3ヶ月の宣戦布告の禁止ですよ？」

「3ヶ月はな」

「?どういう事？」

「明久、もしCクラスの3ヶ月の宣戦布告を禁止がとけたらどうなる？」

「?もちろん復讐に——あ

「そ。無駄な禍根が残る」

「ああ、俺は別に構わないが総司の機転で敵が減った

「最後に僕で脅した奴が言うな！」

騒ぎながらFクラスに向かう。

さてと、Bクラス戦再開するな。

楽しみにしてよ根本！

同盟（後書き）

ちなみに総司は別に根本を嫌っているわけじゃありません。

山本「比較的どうでもいいやつだからな」

なんで今回は根本を貶めるんだ？

山本「今回の根本の行動は感に触ったから」

あつや。

表から裏に裏から表に（前書き）

微妙
……

表から裏に裏から表に

前回のあらすじ

山本「根本と小山はさき合つてない」

「ドアと壁をうまく使うのじゃー戦線を拡大させぬでないぞー」
「意味なく逃げた奴は補習を受けさせるからな」
秀吉の指示に加えるように脅しを混ぜる。

午前九時からBクラス戦が再開し、Bクラス前の位置から進軍して
た。

「ねえ総司」「なに?」「なんかBクラスの様子がおかしくない?」「どんなんふうに?」

「なんてこうか……」「

「やる気がなさひつ?」

「やうそれ!」

おやりくやる気がなさひつなのは昨日の仕込みのせいだらうが……
明久にわかるくらいじゅ相当地だ。

『なにしてるーちゃんと戦え!』

根本もそれが伝わっているらしく、イライラした声が響く。

「姫路の動きが悪いな」

「うん。なにかあったのかな?」

「ああな?」

『いはとまかでおひづ。』

「でもそれを見て、Bクラスの動きも悪くなつてない?」

「そうだな。なにか思い詰めたよつた顔しているな」

「うん」

よしもうここかな?

「いい具合に不満が貯まつてきたな」

「どう言ひこと?」

「まあ、見てなつて。おーい、Bクラスの監ー!」「?..

Bクラスに声を掛けたら明久が変な顔をする。

「裏切れ」

その言葉にBクラスの皆が揃つて道を空ける。

「え！？ なんで！？」

「お前らなにしてる！」

焦つた根本の声が聞こえる。

畏かと警戒して他のFクラスの面々を無視して、明久を伴い根本の前へ。

「明久。 お前が行け」

「え？」

「あれ」

僕が根本のポケットを指すと紙切れが見える。

それを見て明久の顔が変わった。

「総司。 行つてくる」

「（意外といい顔するんだな）戦死したら殺すぞ」

「しないよ！ Fクラス吉井明久、Bクラス根本恭一に勝負を挑む試

獣召喚

「Fクラスがなめるな！ 試獣召喚」

サモン

近衛兵がいなためイラついた様子で根本は召喚する。

明久の召喚獣と根本の召喚獣が現れる。

「明久。さつさと終わらせろ」

「わかった」

「ふざけるな！」

「Fクラス吉井明久

VS

Bクラス根本恭一

数学 31点

VS

186点

わお、6倍もあるよ。

「んの！」
「ほいつと」
「えい！」
「ハズレ」
「当たれ！」
「当たるか！」

うん。なんて表現すればいいのかな？

とりあえず、見たままに話すね？

根本が突っ込んで、明久がそれにカウンターを当てたり、よけて大振りの一撃を入れている。

「なぜ当たらない！？」

「おー、流石観察処分者」

「なに！？観察処分者だと！？」

「ああ、そうだけど？」

「バカの代名詞に負けてたまるか！」

しかし、見る見るうちに根本の召喚獣は弱っていき、

「トドメだ！」

「Fクラス吉井明久 VS Bクラス根本恭二

数学 31点

VS

戦死

戦争は終結した。

表から裏に裏から表に（後書き）

山本「明久の凄さがわかりにくいな」

文才ありませんし？

山本「なぜ疑問系？」

まあ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1263y/>

バカとテストと疫病神

2011年11月21日16時45分発行